

潮騒通信

潮騒ジョブトレーニングセンター

Drugs and Alcohol Addiction Rehabilitation Center

一部 100円

どっこい生きてます!



前号で既報したように、今年73歳の栗原豊センター長、高齢者デイケア「百寿亭」代表のマコトさん、潮騒仕事隊(仕事班)リーダーのシュンさんが、鹿嶋市内にある茨城県立鹿島灘高校に入学し、夜間を中心に高校での「学び」をスタートさせました。入学式(4月7日)はあいにく雨模様の天気でしたが、真新しいスーツ姿に身を包んだ3人は、やや緊張した面持ちながらも新たな分野へのチャレンジに向けて第一歩を踏み出しました。潮騒JTCでは、困難な条件の中で率先して新たな「学び」に燃える3人をしっかりと下支えしながら、入寮している仲間たちの幅広い学習ニーズに応え、スピリチュアルな目覚めと人間的な成長を促すために、5月から「潮騒人間塾」を開講します。

2016

4

山本五十六の教えに習い 「潮騒人間塾」を開講します



先月号で既報したように、私を含めスタッフ3人が地元の県立鹿島灘高校に入学でき、4月から日中の仕事を終えた後に定時制（主に夜間）課程での勉強をスタートさせました。まだ始まったばかりでうまく勉強のコツやペースをつかめませんが、教室では毎日のように新鮮な発見があり、先生方の親身な指導には頭が下がります。この機会を得て潮騒JTCでは、幅広い学びのニーズに応えられるように、施設内における下支えの仕組みを独自に整えるために「潮騒人間塾」と名付けた試みをスタートさせます。これは潮騒JTCに入寮している依存症者の各種学習ニーズに応え、スピリチュアルかつ人間的な成長を促す多様な学習や教育機会の支援をすると同時に、依存症には欠かせない謙虚な生き方を他分野の経験から学ぶものです。

私達の多くは世間から落伍者、ダメ人間の烙印を押されており、自らが「ここまで落ちたのは自業自得なんだ」と自嘲気味に考えるようになっていきます。人並みの向上心や自尊心、自分を大事にする感情や生きていく自信を失くした者が大半です。多くが親の愛情を受けられずに育ち、人間関係を築くのがとても下手です。社会常識に乏しく、モラルも低いために自分を抑制できず、ちょっとした事で他人とぶつかり、トラブルを起こします。潮騒には、人として生きていく基礎的な知識が無い人がとても多いのです。私はいつの頃からか、こうしたハンディを埋め、人として生き直すためには、依存症者向けの独自教育が不可欠と考えるようになりました。この「教育」は単に知識の習得ではありません。うまく表現できませんが、魂の奥底に響く人としての大事な「何か」です。

実は私の考える「教育」は個人的に心酔する人物に関係しています。その人は、かつて勝機が少なかった太平洋戦争に反対しながらも、真珠湾攻撃やミッドウェイ海戦を指揮した、悲劇の軍人として知られる山本五十六・連合艦隊司令長官です。この人に「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」の名言があります。経営者や指導者のための格言として人気が高いようですが、私はそこに「教育」にかかわる深い視点を見ます。まず指導者自らが率先して範を示し、教えを乞う人を納得させ、実際に行動を起こさせて、その成果を良い面や伸びそうな視点から評価してやる。そこまでやらない限り人はなかなか動かないものだ、という人間の内面理解に精通した教えです。

これを現実の場面で実践するには、“お人好し”とも言えるほどの深い信頼と忍耐が必要です。依存症という厄介な病気は「人間(の良心)をひたすら試す」意地悪な側面があります。それだけに時間を掛けた息の長い関わりが求められます。例え裏切られる場面が多いとしても、そこまで仲間を信じられるのはダルクや潮騒JTCの最大の財産です。依存症者は子供のまま外見だけが大人になったような歪んだ存在です。それだけに来月開講する「潮騒人間塾」を通して、私はもちろん仲間たちにも人間的な成長を促せたらと考えています。

(センター長 栗原 豊)

コメや野菜を施設内で自給自足化へ



新年度の計画に沿って農業隊が本格始動

▲ビニールハウスのパイプ組み立てをする農業隊メンバー、自分達でやることで達成感や自信を得ている

4月に入り、潮騒JTCの就労支援活動を担う農業隊の活動が本格化しています。今年も米作りやジャガイモ、サツマイモ作りに重点を置きながら従来通り多品種の野菜作りを進めます。また、潮騒農業を支える猿田農場の施設整備にも力を入れます。米は耕作面積を2町5反歩(約2.5ヘクタール)に増やして施設で消費する1年分の数量を確実に収穫するとともに、潮騒食堂「おらげのかまど」でも過不足なく賄えるようにします。ジャガイモ、サツマイモは地元JAに出荷し、同直売所でも委託販売します。野菜類はかまどで必要な分を賄えるように生産計画を進めます。加工品では干し芋作りの技術を向上させ、よりおいしい商品として信頼を得られるよう付加価値を高めます。

農業隊の多くは施設の太鼓メンバーと重複していたため、各種イベントへの参加を優先させたことから、昨年は農作業の年間スケジュールに影響がありました。その反

省から、今年は潮騒農業と太鼓演奏の調和を図りながら無理のない作業工程を進めます。潮騒の知名度が上がるに従い、農業隊にも新たな地域ニーズや支援者の輪が広まりましたが、農業隊メンバーの体は一つなので支援者の多様な要望に応えきるのは難しいことから、“何でも屋”的な活動から脱皮して「できることとできないこと」のメリハリを付けます。また、農作業の進め方も、とするとベテランメンバーに頼り過ぎる傾向を改めて、仕事の分かち合いや平準化をしていきます。また、収量増大につながることから暗渠排水など基盤となる水田の補強をし、農業隊メンバーを増やしてコメづくりに力を入れます。今後の予定として大型連休後には田植えを実施します。その他、畑作では第2ビニールハウスの設置やサツマイモ蔵の補強作業、ジャガイモ芽だし、サツマイモ移植準備など忙しい時期となりました。



▲春先に田んぼのあぜづくりや田起こしに励むメンバー



▲主力作物に位置付けるサツマイモの収穫作業(昨年暮れ)



2016年・潮騒作業隊の今

農業隊と並んで就労支援の受け皿の大黒柱となっている潮騒 JTC の作業隊(作業班)——。施設営繕と地域ニーズを受けた便利屋的な仕事などでメンバーは多忙な日常を送っています。

本部の外装改修と デイケア内工事をメインに

現在の活動の様子を紹介しますと、メインの仕事としては潮騒 JTC 本部施設(鹿嶋市宮津台)の外壁塗装の改修工事に取り組んでいます。今年3月に着手し、おおよそ3、4カ月の工期を見込んでいます。これと並行して、同市宮中にあるデイケア施設「潮騒アディクションビレッジ会館」4階の元ボイラー室を事務室に改造する改修工事も手掛けており、6月頃には作業を終えたい考えです。このほか、今年は猿田農場の作業所の建築作業も視野に入れています。ある企業の社宅にあった鉄骨プレハブ倉庫を解体・撤去し、猿田農場に運搬。工期などは未定ですが、これを再利用する計画です。先に作業隊が完成させた女性ハウスの作業所建設に使ったものより、素材がいいということです。さらに潮騒 JTC 支援会(メンバーズクラブ)や地域の支援者の皆さんからも家屋の塗装改修、簡易リフォームなどの請負仕事が増えています。先頃 NHK 茨城ニュースで、潮騒独自の就労支援にスポットを当てたりポートが放送され、これを見た地元の人たちから門の改修や犬小屋作り、自宅玄関の直しなど便利屋的な仕事も寄せられるようになりました。

これらは潮騒独自の就労支援プログラムとして、地域ニーズを受けた有償ボランティア活動として位置付けています。資材や機材費、諸雑費が結構かかるので、これら実費に加え、謝礼金の形で施設への献金を頂いています。日本ではキリスト教風土の影響を受けた欧米と異な

り、一般に献金に対しては違和感や抵抗感があるようです。献金というとか宗教的で縁遠く感じられますが、地域社会における助け合いの意味を理解して頂き、あくまで任意ながらも発注者には趣旨に理解を求めています。作業隊メンバーには過去に塗装や建築、型枠大工など職人として働いていた経験者がおり、彼らの指導もあってプロ並みとはいかないまでも、一般のボランティア作業よりも高い水準で仕事を完成させています。このため、「仕事ぶりが丁寧だ」「こちらでお願いした通りにやってくれている」など請け負った人たちから評判を得ており、再度、仕事の依頼を受けるリピーター組が多くなっています。

自分たちの取り組みは 回復プログラムの一環

一方で、仕事請負の際には作業隊メンバーが依存症の回復途上にあり、何を差し置いても自分達の回復を最優先にしており、毎日のルーティンとして欠かせない夜間の自助グループミーティング参加のために、毎日の作業終了を夕方早めに設定しています。また作業完了までの期日を、比較的緩やかに設定することも発注者側には了解してもらっています。リーダーのシュンさんは「自分たちの取り組みは回復プログラムの一環ですが、同時に地域貢献のボランティア活動として考えています。お陰様で少しずつ作業隊の存在が知られるようになり、施設内では先行する農業隊にも劣らない力量を持ちつつあります。これまで仕事を請け負った皆さんから一定の評価を頂

き、自分たちも達成感を得ています。もしかして一般的なボランティアの域を超えているかな、とも自負しています。これらは回復に向けて、いい意味での自信になり、依存症の回復にとってのプラスの効果を生んでいます」と力説しています。

その半面、調子の良い時ほど依存症には落とし穴が待っています。メンバーは潮騒 JTC に漂着するまで、あまり褒められた体験がなく、社会で必要とされる存在でもなかったことから、仕事を通して得る新鮮な感動とは裏腹に、これらの期待に応えたいとする過剰な責任感やプレッシャーが、今度はスリップに繋がるという厄介な側面を抱えています。こうしたことから、シュンさんは「自分たちはできることとできないことをきちんと表明し、クライアントには自分たちが回復途上であることを理解して頂いています。自分たちには社会とは異なる緩やかな生活時間の流れが保障されることが大事で、時間に追い立てられたらダメです。社会では当たり前でも、自分達は“いつまでに”という期日設定を約束することが難しいです」とも話し、自戒を込めていました。



センター長 「自分たちのペースでできることを」

現在、作業隊は10人弱でメンバーが推移しています。が、絶えず“スリップ”の危機には注意を払っています。日常生活で仲間同士の絆を失わないのはもちろん、メンバー個人の能力差とのバランスを図りながら多様な仕事内容への対応できるよう、安全性に配慮しつつ作業のタイミングを見計らった技術指導にも余念がありません。また、工事中の騒音などで近隣住民に迷惑を掛けないように周囲への気づかいも忘れません。これから夏場を迎えると、長時間の単調な作業では判断能力や注意力が低下しがちなので、屋外や屋根の上での作業などはベテランの出番となる場面が増えます。

これまでの経験から、アディクトはとすると「仕事ができる」との声に流されて自分を見失い、特権意識を形成しやすいので、農業隊やデイケアスタッフとの連携強化を図っていく方針です。栗原センター長は「作業隊へのニーズは高まるばかりですが、まず回復ありきが基本。時間に追い立てられることなく、無理せずに取り組んでほしい。肉体的にも精神的にもメンバーの疲労やストレスの蓄積はスリップに繋がる大敵だけに、自分たちのペースでできることをやっていくことが大事」とアドバイスしています。

どっこい

私も生きてます

第八回 | チハルの回復記

自分の前に現れる「不合理な存在」の退治へ

都内の区立中学の入学式当日に遭遇した、思いもかけない理不尽な集団リンチ事件で、私の人生は大きく狂い始めた。友人だった私をワル仲間に見出し、有無を言わせない集団暴行の悲惨に加担した、一つ上の仲の良かったはずの友人の目にフォークを突き刺して重症を負わせた報復行為により、私は学校側から登校を禁じられた。しかし、私がリンチを受けたのが、「小さな体のくせに既製品ではない、ブカブカの学生服を着ているのは生意気だ」という、取るに足らない理由だったことを知り、私は中学に上がったばかりのその段階で極端な人間不信に陥った。

それ以来、この中学校には卒業の半年前まで通うことはなかったが、既に小学5年で毎週日曜日には電車に乗って神奈川の鵠沼海岸にサーフィンをしに行くようになっていた私は、自分なりに「楽しい遊び」を見つけることには長けていた。それにマセタ従姉妹たちは私立中学へと進学し、これにも感化された。登校拒否を始めた私の新しい学校となったのは、新宿にあるディスコ(今のクラブ)だった。毎日のように通い、やがて酒に女に喧嘩に明け暮れるようになった。私は踊ることより、曲をかけるDJに興味を持ち始めた。好きだった異性の力になりたいと、下心ありありの片思いにも心動かされた。その時は充実した遊びの生活に思えても、なぜかうまく言葉に表せない空虚感が心の奥に広まっていた。

とにかく私はリンチ事件をきっかけに、目の前にいる目障りな存在を駆逐する「不合理な存在の退治」に明け暮れるようになった。私は不良と言う言葉は嫌いだ、が、「鳥の巣頭」の人間は虫唾が走った。当時コミック誌では「不良もの」が流行っており、みんな憧れ被れていたが、私は心の中で「なんて格好が悪いんだ!」と馬鹿にしていた。私はその後、反社会組織に身を置くようになるが、その時代を含めて不良とかツツパリだとかを格好がいい、と思ったことは一度もない。私の目の前に「鳥の巣頭」や「大仏」頭を見ると“退治”したくなるのだ。

冷静に過去を振り返ると、私は自分になりたくないと思っていた人間像になるという逆説人生を歩んだ。その根本には私のアディクト(薬物依存症)問題がある。誰も好きでこんなヤク中人生を送る馬鹿はいないと思う。私もその一人だったから、人一倍過去には未練と恨みと嫉妬しかない。私はこの苦難を乗り越える新しい何かを見つける事が出来ず、随分と長くもがき苦しんだ。実際、自分からは新しい生き方を発見することも、見つけようとしなかった。私の人生観が変わるのには、潮騒 JTC との出会いまで待たなければならなかった。(第1部終わり)

第4回「恨みとコーヒーカップさえあればダルクは増えていく」

ユタカ vs トム 対談



前は、松戸市にあった当時の千葉ダルクでの生活から約50日後に、施設側の都合で面接を受けて神栖市の鹿嶋ダルクへ移動した流れを主に栗原センター長から伺いました。そして1年後には仲間を巻き込む飲酒問題で施設から処分を受けた、とのことでしたが、その頃をもう少し振り返ってもらえますか。(司会進行・広報部)

鹿島ダルクでの生活で 「霊的な目覚め」を体験

ユタカ 当時、鹿島ダルクは入寮者もスタッフも若く30歳代が多かったけど、例外的なメンバーとして、私より年長の66歳の入寮者もいました。常日頃「俺が最年長」と自己中心的に考えていたので、私には小さな驚きでした。老いへの自覚なんてなかったから、自分を映す鏡の存在に思えたんですね。だから、依存症の世界もだんだん高齢化していくんだらうな、という複雑な思いもありました。そんな折、ダルクでの生活が4カ月を過ぎた頃だったかな、ヤクザ時代の郷愁が突然再燃して「こんな軟弱な環境の中にいたら、社会に戻っても使いものにならない、生きていけなくなってしまう…」という強迫観念が芽生えたんです。

——それって施設での生活が落ち着き始めた頃に、みんなが通る道ですね。

ユタカ この話には続きがあって、その疑問を仲間の前でつい口にしたら、先行く仲間の若い入寮者から「ユタカ。刑務所以外の人生で4カ月もクスリ止まったことがあるの？」って。その瞬間、私の体が硬直したんです。「そうだよな、こんなに長くクスリをとめられたことは、これまで一度もなかったよな。俺のような者でもダルクに繋

がっていけば神に守られているんだ。みんなが信じるハイパーパワーっていう大きな力に…」って思えたんです。そこから辺からダルクに身を預けることに疑問を抱かなくなり、少しずつプログラムが体の中に入ってきた感じでね。あれって今考えても不思議だけど。

その時はまだクリーン数カ月なんだが、「俺は今一人ではない。大きな力に守られ、回復に向かっている。この道に間違いはないんだ」と。そういう確信めいたものが私の心の中に生まれた。永遠の病気(依存症)と対峙しながら60歳にして初めて虚勢を下ろし、ありのままの自分を受け入れる歩みを始められた瞬間でした。あれが私の霊的な目覚めだったかもしれません。とても遠回りな人生だったけど、ヤクザな過去は決して無駄じゃなかった。逆にこれからは、マイナスだった経験がプラスに転じるような予兆を感じました。それから施設スタッフとして腰を据えるようになり、同じ病気に苦しむ仲間の回復をサポートすることにやりがいを感じました。やがては社会貢献の活動へと発展していく希望というか、ビジョンのようなものがほんのり見え始めたんです。

——そこは一般の入寮者や、ごく普通のスタッフとは異なるセンター長の、ダルクでの特異な経験ですね。ところでセンター長が具体的にトムさんにアドバイスを求める場面というのは、いつ頃だったんですか？

ユタカ えーと、トムさんに助けを求めたのはもう少し時間が下って、鹿島ダルクを出て間もなくでした。成り行きで全く無計画に独立したものだから、すぐに行き詰まってしまった。怖いもの知らずで鹿島ダルクを飛び出したのはいいいとして、回復のプログラムはもちろん、当座の運営資金も支援者も何もない。“無い無い尽

くし”の無謀なスタートでした。当然ながら一緒に飛び出た仲間達はスリップの続出で、施設に充てたアパートはまるでアヘン窟みたいになっていた。そこで、トムさんに助けを求めたわけです。かつて手紙のやり取りを通してトムさんには、特別に親近感や信頼感を抱いていましたから。

■ スポンサーの依頼を受けたことが自分の成長に

トム 逆説的だけど、あの時のユタカさんの決断は、僕はよかったと思う。だって、よく言うでしょう。「ダルクは恨みとコーヒーカップさえあれば、どんどん広がっていく」って。ダルクってそういう場所だから。自助グループの原理と同じで、そこで芽を摘んでしまうんじゃくて、自分に合う新たな回復の居場所をつくるっていうダイナミックな発想。ダルクだって人間の集まる狭い世界だから、それも社会経験のあまりない個性的な連中ばかりだから、他の世界と同じように回復途上のメンバー同士が感情的なすれ違いや、ちょっとしたボタンの掛け違いによって対立が生まれることはよくあること。でも、それをうまく方向付けして、お互いを反面教師のようにして自立心を育てていくことは、とても意義ある事です。

僕からすればユタカさんがどんどん成長して施設を広げていくなんて、想像すらしていなかった。だから何も(断る)理由なんてなかったですね。スポンサーとなってほしいと頼んでくれたことが、逆に僕にとっては大きかった。自分もそれによって成長できましたから。だったら、その人のために一生懸命に考えようと、この人が人としてきちんとやっていくことが大事だと考えて、応援するよりじゃないじゃないですか。それって当たり前の事ですから。それに僕なんかが下手にアドバイスって、しにくいですよ。僕からすれば、ユタカさんは年上だし、生意気な事なんて、ちょっと言えないじゃないですか(笑)。

それに元々僕は人にももの言うタイプではないしね。ただ、この人が孤立しちゃったら困るな、とは考えた。ここで爆発しないでください、と。アドバイスなんてもんじゃない、僕からの切なるお願い(笑)。どうか押さえてね、という感じだったかなあ。その思いは、結果的にユタカさんには通じたと思います。

—— センター長にとっては、トムさんがスポンサーとなってくれたことはとても有難かった訳ですよ。

ユタカ 間違った方向に行きそうになると引き戻されたからね。今まで私が真っ直ぐ来られたというのはトムさんのお陰、そして近藤(恒夫・日本ダルク代表)さんのお陰

です。まあ近藤さんの影響って直接はないんですが、トムさんの背後には近藤さんがいたということで、やはり二人の存在の大きさを感じます。

—— 本来なら、この連載ではセンター長が鹿島ダルクから飛び出た経緯などを客観的に検証したい気もするんですが、いつまでも過去の対立を根に持って引きずり、こだわり続けることは、ひたすら主観と主観のぶつかり合いで不毛に終わるだけです。依存症の世界では公平なジャッジなんて無理ですからね。

そんな無駄な事にエネルギーを費やすなら、互いに袂を分かち合ったそれぞれの流儀で、一人でも多くの仲間の回復を手助けする方が理に適っています。懐の広さが身上のダルク精神からすれば、方針や考え方の違いが正しい意味での対立に繋がり、新たなダルクを生む訳で、これはダルクの歴史や依存症の回復史にとっては大きなプラスです。

■ 助けられた人がその経験を次に伝える“命のリレー”

トム その通りだと思います。近藤さんがよく言うけど、ダルクを作るのはそれほど難しくない。古い一軒家と恨みとコーヒーカップがあればいい。「ここが嫌なら違うダルクをつくりなさいよ！」というのが近藤さんの流儀です。利用者は回復途上なので、いろいろな文句を言い合う。つい感情に任せて「じゃあお前、そういうなら自分で作ったら？ その方が話早いし、生産的でしょう」ってね。そうして各地に広がったのがダルクなんです。ダルクはもともと思想や信条、宗教などに囚われない、ある種の社会運動みたいな側面があるから自由にやっていい。登録商標でもフランチャイズ(営業圏)でもない。ただ、やっていくには3年ぐらいのクリーン期間や施設スタッフ経験があった方がベターかな、っていう程度。だから縛りなどないんです。

ダルクの活動は当事者をエンパワーメント(人びとに夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っている素晴らしい、生きる力を湧き出させること)することで、助けられた人自身がその経験を次に伝えるという“命のリレー”なんですね。それも人のためや誰かのためでなく、自分の回復のためにやっていく、そういうモチベーションが基本なんです。

もしミーティングの仲間同士で反りが合わなくなったら、分裂してまた新たに仲間を探してグループを作ればいい。そうやって参加人数が増えていくことで、助かる人も増えていく。僕はそう考えます。(次号に続く)



潮騒 JTC 女性ハウス「るみの家」の春季恒例イベント、お花見&ボウリング大会が4月10日、鹿嶋市中心部の城山公園とボウリング場(鹿島ボウル)であり、女性メンバーが楽しい時間を共有しました。以下はその感想です——。

なあな 4月10日は、私にとって とても充実した楽しい思い出に

私がココにきて初めての仲間全員が参加できた行事でした。皆笑顔があふれていて、それを見る私も笑顔になれたし、とても楽しい1日が過ごせました。お花見では、2人1組でチームを組み、コントをやりました。とても爆笑の嵐でした。ボウリングではセンター長も加わり、3人1組でチームを作り試合をしました。見事に私たちのチームが優勝しました! とてもうれしかったです。4月10日は、私にとってとても充実した楽しい思い出ができました。

あみ 私の中で何か変わろうとして ドキドキしています

施設に繋がる前の最後のお花見は2年前の4月で、祖母と母と妹と4人で地元の大平山に行き、記念写真を撮ったり、名物の卵焼きを食べたり、お団子を食べたりして、歩きながらお花見をしました。そんな思い出がすごく心に残っていて…。その後に私が捕まってしまって刑務所に入り、出所したと思ったら出所した当日、母に電話したら「昨日、おばあちゃんが亡くなったんだよ」と聞いて、

危ないとは分かってたけど、こんなに早く、しかも私が出所する前日に、って考えたら、すごく悲しく淋しくなったけど、私は決して涙を流しませんでした。だって祖母は私の心の中でずっと生きてるから—。死に目に会えなかった悔しさはたくさんあるけど、今きっと天国で見ていてくれると思うし、力をくれてる、と感じています。だから今、頑張ってる私がいるんです。

そして今回「るみの家」のお花見&ボウリング大会、すごくウキウキして嬉しかったです。ボウリング大会は結果7位でした(笑)。小学校以来だったように思うので、まあまあ仕方ないかなって。でも楽しかったあ。ストライク3回出せたし、自分では満足です。また半年後に大会があるかもしれないので、その時はSTEP UPして上位を狙いたいですね。私は「るみの家」に来て、本当に良かったと思います。今、私の中で何か変わろうとしています。ドキドキしています。変化していく自分を私は応援して、それで成長し、周りからも「変わったね」と言われたいです。先は見えないけど、今を大事にして精一杯生きます。

いるか ここにきて何をやってもしらふで いるのがとても凄い事

昔は花見といえばお酒が付きもので、酔っ払ってよく身内同士で喧嘩になったり、色々大変なこともありましたが、私は義理の妹の子供のお守りをしていることが今思えば多かったです。それはそれで楽しかった。今回ここにきて3度目のお花見だったけど、お酒も飲まずにお花見をしてこんなに楽しめるんだと思いました。俳句をや

り、ゲームでトランプ、それに一発芸をやって、私と“たかこ”がやった一発芸が一番になりました。桜の花も満開で花卉が散り始め、まるで雪が降っているみたいで良かったです。写真もたくさん撮りました。その後はボウリング場に行って、何十年ぶりにボウリングをしました。点数はあまりよくなかったけど、懐かしい思いでやりました。昔はお酒を飲みながらやっていたように思いますが、ここにきて本当に何をやってもしらふでいることがとても凄い事だと思います。でもこれが普通なんだと思えるようになりました。これからは普通に当たり前のことがしらふで出来るようになっていきたいです。



みーんが笑ってくれて とってもうれしかった

あんなに暖かくて桜満開のお花見は初めてでした。そして、あんなに笑えるなんて思ってもなかったし、それに選ばれるなんてサイコーな日でした。きっと周りの人たちはうさく思ったかもしれませんが、みーんが笑ってくれてとってもうれしかったです。それとボウリング大会。私は自分なりにそこそこいけるんじゃないかなーと思ったのですが、まさかのビリでした。ほとんどガーターでチームでもビリ、1人でもビリでした。でもそれはそれでまた別の楽しみで、今日はすっごく腹筋を使うほど笑いました。多分明日は筋肉痛だと思います。でもこうやって仲間に気を遣って色々な催しを提案してくれる、センター長、施設長に感謝です。付き合ってくれる人がいなければ、あんな笑いも起こらないことでしょう。今日はあつという間の1日でした。



しらふの花見で心がキレイになり 新しい自分を発見

刑務所を出所してからの初めてのお花見でした。何もかもが新鮮で、桜も満開で、お酒がなくてもすっごく楽しく盛り上がって、覚醒剤をやって家にいるなんかより全然よくて、心がキレイになった。新しい自分を見つけた気がする。家族とお花見に行ったことが、あつたような、無いような…。でも、今日こうして仲間と楽しく充実した1日を過ごせたことに感謝だし、途中からセンター長もいらっしゃってくれて、ボウリングにも参加していただき、家族ってこうなのかなあ〜と感じさせてくれた。施設長とセンター長に、これからは色々なプログラム、レクに、一緒に出来たらと思いました。改めて仲間の良さが分かり、とても私にはもったいないくらいの1日でもあり、ボウリングでも個人賞が取れ、色々な意味でハイヤーパワーが

私にやっと感じることが出来ました。何よりも「全員参加」出来たこと！嬉しく思ってます。自分や仲間が回復していること、クリーンでいられていること、これからは続きますようにと願っています。この日を忘れないし、これからも作っていきます。



優勝を逃し「アルコールがなくても 勝つ？」と心に誓う

お花見とボウリングに行こうとルミさんに誘われ、「ヤッター！」って喜ぶ自分がいました。過去の花見は、大量のビールを買い、適当な場所を探し、桜を見るよりはその雰囲気を楽しむことだけだったけど、今の自分はキレイな満開の桜を見て、写真に残したいと思う気持ちでいっぱい…。私の目で見た桜、心の宝物になりました。そしてボウリング大会へと移り、自信満々でした。過去のボウリングといたらよい成績で、景品も私がもらうのだろうと思いながらの買い出し。しかし、今回は個人優勝を逃す結果に…。同室の“そら”は、「私下手くそだから…」って言うたのに1位になり、悔しさ一杯でした。負けず嫌いの私は、今日のボウリング、アルコールが体に入っていないから負けたんだって思ってます（笑）。過去の栄光に縛られたくないから、ぜひリベンジをと考えています。アルコールがなくても勝つ？と心に誓い、日々体力づくりに励みます。本当に毎年、桜が見たい、春の一大プログラムになればと願っています。



クリーンな頭で見る桜の花は 本当に美しかった

私の嫁ぎ先は割烹料理屋を経営していたので、花見の時期になると歓迎会の予約が入り、自分が花見をしたことがありませんでした。毎日が家事と仕事と育児で忙しく、姑にはいじめられて、でも我慢する自分しかなくて、アルコールでストレスを発散していました。そんな月日が30年も続き、私は立派なアルコール依存症になっていました。入院を3も繰り返し、家族にも縁を切られ1人になり、もうどうにもならなくなっていました。24時間飲み続け、周りの景色や季節の花や道端に咲く野花さえも目に入りませんでした。それが「るみの家」につながって季節ごとの行事を、(今回は花見でしたが)クリーンな頭で見る桜の花は本当に美しかったです。仲間との手作り昼食、一発芸や俳句のお披露目、その後のボウリング大会、以前の私でしたら、必ずアルコールが入っていたのですが、しらふでやるボウリングは初めてで、しかも思った以上によい点が取れたのでうれしかったです。

受刑者からの手紙

体力年齢面から叶うなら1日も早く帰れるように願う

私は昭和28年生まれのO・Tと申します。現在62歳です。中卒後は定職にも就かず、住居も転々とし、成人するとM市に移り住んだのですが、その家族をはじめ何の関係もない方々にまで多くの迷惑をかけてきました愚者です。そしていまだにこの年になって収容生活の場にあり、現在、当刑務所にて恥ずかしいことに13回目の受刑生活となりました。前回2年の刑で新潟に服役し、任期満了でM市に戻りました。即日、市役所の世話にて、市内の無料定額施設に入居させていただきました。そこに9カ月くらい置いていただき、役所のアドバイスにて市内にアパートを借りていただき身の丈に合った生活をしており5年半の間静かに日々を過ごしておりました。

私がアパートに移って間もなく、16歳になった娘が生後7カ月の子と彼氏と共に私の住むアパートに入居の手続きに来たのです。全く知らない若者でありながらも、大変だなあと感じつつ相談相手として話している中、娘と分かり、世間の狭さに驚きました。私が若いころに刑務所との縁が切れず、当然にして母方にいた娘が面前に…私も役所の世話になっている身で大したことはできないまでも、ここで何かしらの援助がしてやれないかと気持ちに張りが湧いてきて、いつでも会えることがうれしく、楽しい毎日であったかのように思います。それまで最高で1年ぐらいの社会生活で、外と堀の中を行ったり来たり…。今回、5年半も社会で生活できたのは役所と娘たちのお陰であると感謝しています。その娘たちも夫婦ともに車を所有し、マンションに住み、二人の子供と生活するまでとなり、21歳と23歳の若さでギリギリの生活では？とは思いながらも、私の役目も終わったか、親離れならぬ子離れの時期かと安心と淋しい気持ちの複雑な思いがしました。

そのような中、気の緩みとは申しませんが、私の知人からの紹介で見知らぬ男の人が訪ねてきました。不要となった車があるので私の友人が営む解体屋に連絡して引き取って欲しいと…。見る限りでは前頭部がつぶれたり、何年間も放置されたもので、疑うことなく実行に移り、その謝礼として少なからずのお金を受け取り、最後の車を引き上げている中、所有者が現れて、これまでの車(5台)が盗難であることが判明し、その場で逮捕となりました。お互いの尿から覚せい剤反応も検出され、車の方も謝礼を受け取ったこともあり、共犯とされました。解体屋の方と私と依頼者の内、2人はM署で私はN署預けとなりましたが、解体屋の方は私の証言から不起訴となりました。とにかく、依頼してきたにもかかわらず全て逆の供述をしているとのことで、丸3カ月の接見禁止…。この間にこれまで築いてきたものが一瞬にして失った気がして、心から後悔しております。

刑事・検事さん共に話の内容は私の方が本当であるとしてくれたものの、窃盗の方はどうにもならないが、依頼者の〇〇が私から覚せい剤を譲り受けたことは嘘であると、譲り渡しの件はなしとしてくれました。今回共犯となりました相手は10年近く逮捕されなかったことで、猶予刑を狙って私に責任転嫁したとのことから、私と解体屋の方が検事側の証人として出廷しました。私は2回、相手は4回の公判でしたが、私の判決は3年(求刑4年)で、相手の判決はわかりません。裁判官が最後に、「覚醒剤事犯で7回の受刑、依存性は認められるが、本人も深く反省しており、娘さんの証言の通り今回こそ更生できるものと信じ、この判決になりました」と付け加えてくれました。

私も体調、年齢的にも厳しい受刑生活、1日も早く帰れればと娘の了承も得ず勝手に引受人と記載してしまいました。娘も一応納得してくれたのですが、娘21歳、婿23歳、4歳と6カ月の子供の4人家族であり、生活面で大変な中、どうして勝手に引受人などと後悔しておりましたところ、分類の職員に先日、引受人である方と会えないので(緊急不可)との告知がありました。この件で内心はこれ以上私のことで負担が減ると、ほっとしたような思いになったのですが、他に引受人の心当たりがなく、今回も満期か…と諦めておりました。

この件につきましては最初に仮釈は面倒なので要りませんとしてきたからでしたが、やはり体力・年齢面など考えれば、今回は叶うならば1日も早く帰れるようにとの思いが強く、でも、それは私が決めることではなく、とにかく1日でも早く出所するには引受人が第一であり、気を揉んでおりました。そこで思い出したのが貴センターの存在でした。この話をしてくれたのはM署にいる時に20回近く接見に来てくれたU市の弁護士さんでした。「出所しても当然市役所の世話になるしかないのです、どうですか？何か困った時にはセンター長に相談してみても？」と助言されました。このような私でも入寮させて頂けるのでしょうか？

(神奈川県 O・T)

今回紹介した受刑者の手紙は、熊本で続く大地震の前に届いたものなので触れられていませんが、気になるのは大規模災害時における刑務所の対応です。震災で建物が被災した場合の対応は、地域の緊急避難所となるのか、受刑者の避難や安全性は確保されるのか、人命優先から開場されるのか、3・11の巨大地震・大津波・原発事故の時はどうだったのか…、マニュアルはあるとしても「予想を超える」大地震が現実化しているだけに、関心を抱きます。(潮)

辛く苦しい気持ちを薬断つ力へと変えたい

お手紙ありがとうございます。私は元気に務めています。最近6カ月の無事故者となりました。楽しみといえば週末の集会です。2月の頭にはカラオケ大会がありました。みな上手でした。当地も3月になって、だいぶ生活がしやすくなりました。4月から(職業)訓練を受けようと考えています。その中で清原の事件が頭の中に飛び込んできました。今だから言えることかもしれませんが、TVに出ていた清原を見ていて、いろんな思いが頭をよぎりました。そして一度(社会)復帰した時の自分自身について振り返ったりしています。

本当に服役中に何かあれば辛い時間が流れます。苛立つことばかりです。フジさんが言うように自分がしっかりとすることが大事だと私自身も思います。薬物をやめたい気持ちは本気です。とにかく復帰の日が来るその日まで、強く気持ちを維持していきたいと思っています。辛い気持ち・苦しい気持ちをフジさんが言うように、薬を断つ力へと変えていきたいと思っています。私も地元から少し逃げようかなと考えています。帰る場所はS県ですが1時間も走れば地元です。そんなことを考えています。回復してほしいと思っていたらいる栗原さん・フジさんの気持ちは本当にありがたく思っています。何とかこたえたいと思います。本当に感謝です。悪友とは手を切ります。その道を歩んでいこうと思っています。私の人生とは、についても考えています。職人としての道を進み、本当にもったいない人生にしていること、そしてこれからは本気になり薬物と戦っていきます。

私も3月で1年になりました。TVを見ていて薬物の者に対して仮釈のことを話してあったのですが、3分の1がどうのとか言ってあったように思うのですが、何のことなのか理解ができませんでした。何のことなのかわかりますか？わかるのであれば教えていただけないでしょうか。お願いします。私も残り2年ちょっとです。一步一步大切な時間にして考えていきたいです。体づくりのために15分の運動で腕立てをしっかりとやっています。千回やっています。土、日では午前と午後で4千回です。もうフラフラです(笑)。色々とチャレンジしていこうと考えています。これからも回復することをよく、よく考えていきます。アドバイス色々をお願いします。(長崎県 F・T)

事故を起こすことなく落ち着いて静かに生活したい

栗原さんお元気ですか？寒い日が続いておりますが体調を崩していませんか？インフルエンザが流行しているようですが、大丈夫ですか？当地も暖かい日があったり、とてもとても寒い日があったりと、生活がしづらい日が続いています。しかし、私は今のところ風邪をひくこともなく、元よく工場での作業を頑張っています。一つ報告があります。私がずっと心待ちにしていた仮面接があり、仮釈のための第一歩を終えましたので、とても嬉しいです。今ここへきて事故など起こしたくありませんので、落ち着いて、そして静かに生活したいといつも自分に言い聞かせています。工場での生活には色々なしごきもありとても大変ですが、人は人、俺は俺と周りを気にせず、余計なことには首を突っ込まないようにしています。一日も早く、潮騒で依存症と闘っている先輩方と一緒に頑張っていて、辛い時も、楽しい時も、同じ輪の中にいて自分自身の病気と戦っていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

今の工場へ罰明けで配役になったのが昨年8月でした。今年2月1日付で6か月無事故をいただきました。今の私は、4月1日付で3類に進級することを目標として生活しています。今度が3類になれるラストチャンスなので、地に足を着けて、落ち着いた生活をするように心がけて頑張っています。3類になったからといっても、これといった変化はないのですが、月に一度の集会に参加できるくらいです。でも、4類の今の自分と3類になった自分では務めていく上でのモチベーションが違ってくると私は思っています。運動時間は、ずっと走っています。走るのが好きということもありますが、社会へ帰った時に健康な体で生活をしたいと思う気持ちもあり、続けています。自分と言うものなんですが、53歳にしてはまだ働ける身体だと自信を持っています。(山梨県 S・H)

しおさい俳壇

4月のお題

入 学

選者 桐本石見

わが俳句人生の歩み・No.28

センター長 栗原 豊

罪問わる 椅子の固きや 弥生尽 ※弥生尽=陰暦3月の終わり、晩春

言い訳の ならぬ手錠を 花の冷え

前回、前橋刑務所を出所してすぐに連続飲酒してしまい、気が付いたら銃刀法違反の容疑で逮捕され、大宮警察署の厄介になったことを書いた。たった一人、私の出所を出迎えてくれた姪の期待を早々と裏切ってしまったのだから、つくづく私の病気の根は深かった。それでも姪は辛抱強く、私を回復ルートに乗せようと、その後も親身になって下支えしてくれた。お陰で私はダルクに繋がることができたが、姪は受刑中にも何度かダルクについて説明する手紙をくれていた。でも、当時の私は自我に任せて“底つき”できない段階にあり、表面上は多少関心あるかのように振る舞いながらも、本音では「ダルクなんかに頼らずに自力で更生してみせる」との強がりを捨てきれなかった。

今振り返ると気恥ずかしいが、その頃の私の手紙――。

「さて、君からの手紙に書いてあった施設の件ですが、私は過去一度も利用した経験がなく、その方面には全くの無知です。若しかの場合には世話になるのもいいかなと思いました。刑務所から出て直ぐはほとんど病人ですから…ネ。私の体は環境の変化になかなか馴染めないですよ。ここ3回の出所では、いつも社会に慣れない此の期間、つまり病人状態の時に“頑張らなきゃ”“頑張らなきゃ”と焦ってしまい、結局は同じ失敗を繰り返しています。今度こそスリをやらない覚悟が出来るので、同じ失敗はしないと思っている。病気になりそうになったら直ぐに、良き友である君に相談します」

ここに書かれた施設とは、いうまでもなくダルクの事である。出所したら私を何とかダルクに繋げようと、姪は「依存症は病気であり、まずは治療とリハビリが必要」としつつ私を説得してくれていた。でも、私は手紙の字面では過去の過ちの反省と更生への決意を述べながらも、依存症の理解などほとんどなかった。(この項つくづく)

入学の

風呂敷包み
昔かな

特選句

あべ

ランドセルは幕末の頃軍兵が携行物を入れる背囊(はいのう)のオランダ語のランセルがこの名になったとも、また明治二十年頃後の大正天皇が学習院の入学時に、今の形のランドセルを伊藤博文公が献上したのが始りとも。庶民は風呂敷に教科書などを包んで通った、懐かしい句。

城跡の

桜の下
初デート

特選句

ひろ

幕末までの城には松、杉、竹、梅、樺、楠などの実用になる木が植えられたが、明治四年の廃城令以後は公園として開放したので桜が植えられ憩いの場となった。初デートは誰も胸ときめく記念の出会いだが、桜の下は明るい二人を彷彿させ、恋の稔りを祈りたい句でもあります。

七十の

我も青年
入学す

特選句

ゆたか

最近では定年後に高校や大学で勉強する人も多く、テレビのニュースもなる。他にも趣味はあろうけども、敢えて挑戦する意気に敬意を送りたい。戦後は特に貧しく上の学校に行けなかった自分を思う句でもあります。

今月の秀逸句

藍染めの調布の歌斑雪

イチ

調布は大昔に税金の代りに納めた布のこと地名としても残るし、「たづくり」とも言い昔は麻が多かった。万葉歌に「多摩川に晒すたづくりさらさら」に何ぞこの児のここの愛しき」があり、現代では増田ジゴロウの、「あたし今日もまたパルコ前で待つてるの……」(調布のうた)があります。斑雪は、はだら雪で疎(まば)らの早春の雪。雪に藍色も美しく昔を偲ぶ句です。

山桜すそより暮のせり上る

もと

この近くでは筑波山の西側斜面に梅や桜が多く植えてあり、夕方には裾野は暮れて中腹の桜が夕日に映えます。また有名な吉野山の桜も谷は夕べでも上の方は明るく浮く様ですが、そのうちにこの詠の様に暮れてゆきます。実感の夕桜の美しい句でもあります。

晴の日の娘の笑顔朝桜

れいこ

原句に季語が無いので朝桜とし、これで桜の咲く朝に入学か入社か、或いは結婚式の門出の句になります。江戸時代初めまでは武士に桜はすぐ色褪せると嫌がられました。今では桜の頃が入学にも年度の初めにも祝いの様で春に相応しいです。

夢叶ひ入学式の孫の顔

おの

我が国の教育は聖徳太子が三経義疏の中で万民にも教育を説き、七〇一年大宝律令で大学寮が定められ、その後は寺院や大名公家の私学的の中で明治を迎える。しかしどの時代でも入学までには試験や裏道など苦労を歴史が伝えるし、現代でも希望の学校に行くのは難しい。孫の笑顔を彷彿する句です。

一年生僕より大きいランドセル

かこ

ランドセルは一年生の時から卒業まで使うので、入学の頃にはランドセルが歩いている様にも見え、重そうで可哀相でもある。せめて三年生まではもつと小形のカバンはないものかとも思うし、それを背負って元気に通う姿は微笑ましく声援を送りたい。

初恋のあの娘のほっぺ桜色

こば

万物の霊長と言われる人間に幸か不幸か恋があり、古来から小説や詩歌に詠われる。現代は有名人が週刊誌の記事になり、昔は源氏物語にもなり幸せもあり悲劇もある。この詠は学生の頃の思い出かも。うす紅の桜の花を見ながら懐かしむ句です。

佳作

水色の洗濯ばさみ若布干す	イチ	思い出の川治川原湯朧月	ゆたか
踏切 ^{きぶし} へ木倍子の垂るる箱根かな	イチ	海鳴りの長谷の黄梅観世音	イチ
並足に馬の通れる朝桜	もと	桜散る我が身の老いも確かな	おの
新しきランドセル行く今朝の道	しま	桜見て娘を想ひ一人酒	けん
ランドセル黄色帽子新学期	そら	桜よりお団子よりも生ビール	いげ
入学の今朝の道々桜咲く	いるか	三才の娘可愛ひや桜餅	わか
桜舞ふ新生活の今日よりぞ	なあな	靖国へ思い深かむる桜かな	ひろ
旅立ちをホームの桜見てるかな	ひろ	入学に写りし母もセピア色	こば
トンネルを抜けて信濃の山笑ふ	ゆたか		

どっこい

私も生きてます～我が回復記～「トンちゃんの回復記」

第2回

依存症の機能不全家族と酒に寛容な漁業町で育つ

冷静に振り返ると、自分が育った家庭はやはりアルコール依存症の、いわゆる機能不全家族だったんだろうと思う。そう自覚するようになったのは、もちろん潮騒に繋がって自分なりに依存症について学んだからだが…。自分の家族は両親と2人の兄、姉の5人家族で、父親は大手製鉄所に勤務していた。でも、アルコールに問題を抱えていたことから家庭内でのトラブルが絶えず、やがて母親と離婚。共依存の母親は魚屋で働いて暮らしを支えた。世代連鎖のように自分も兄たちも依存症を受け継いだのかもしれない。

これには故郷の得意な風土や住民気質も大きく影響しているとも考えている。自分は生まれ育ったのが太平洋に面した千葉県房総の漁師町とあって、どことなく地域には荒れたヤクザ的な雰囲気があり、飲めないとバカにされるように、酒にはとても寛容な土地柄だった。確かに適度な酒は人間関係の潤滑油になるが、自分の周囲の人間たちはそれで済むことはなかった。自分も兄たちも早くからそうした地域風土の洗礼を受けて育ち、やがて中途半端なヤクザ人生に踏み入ってしまったのも、今となっては妙に納得できるような気がする。不幸にも兄たちは尋常な死に方ではない形でこの世を去り、父親も誰にも看取られずに孤独死みたいな死に方だった(それについては次号以降で触れたい)。

自分は地元の中学を経て、遠洋漁業の基地として全国に知られる隣り合う漁港町の水産高校に進学。ここではツッパリ生徒として周囲から一目置かれる存在で、服装などで自分を目立たせた。学校を終えて電車が地元駅に着くと、地元の暴力団組員の兄貴分が黄色のコルベットで迎えに来て、「今からナンパしにいこうぜ!」というのが日課だった。最初のうちは調子よく相手をしてくれたが、やがて兄貴分は少しずつヤクザの本性を現してきた。次第に「このまま付き合いを続けていたら自分の人生が危うい」と考えるようになり、運よく知り合いの紹介で高校卒業を機に県内でも都市部に近い町にある製紙会社に就職できた。付き合っていた女性とも結婚でき、子供を設けることはなかったが、約20年にわたり人並みの幸せな夫婦生活を手にしていた。(以下、次号に続く)

4月のバースデー

ツグオ

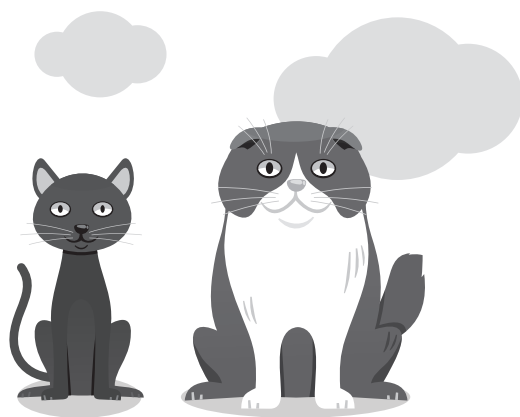


まんま食べて、お酒やめます。
頑張ります。

まっちゃん



今日一日



潮騒コラム

メダルが期待されたバドミントンの若手選手が、暴力団と関係のある闇カジノ店に出入りし、リオ五輪出場を棒に振った。彼らは典型的なギャンブル依存症である。罰を与えるより治療とリハビリの場に繋げるべきだが、常識を持たない世間知らずの「ばか者」という道徳的な批判だけが集中した▼スポーツ選手は聖人君子ではない。トップアスリートともなれば厳しい練習に耐え、常に「勝つ」ことを運命づけられた存在である。勝ち負けを競い合うスポーツと親和性の強い賭博に足をすくわれることだってあるだろう▼日本にはスポーツを安易に聖域化し、賭博は悪と決めつける風潮が根強い。スポーツ選手は例外なく「清く、正しく」なければいけないのだろうか。賭博を悪とするなら、競馬・競輪・オートレース…の公営ギャンブルはどうか? 「健全な賭博」のビッグやサッカーくじはどうか? ▼スポーツ選手だってリハビリに励めばきちんと回復できるはずだ。(勝)

4月の行事予定

- 10日 「るみの家」お花見&ボウリング大会
 10・16日 秋元病院メッセージ
 14日 潮騒俳句会
 24日 潮騒家族会

5月の行事予定

- 4日 潮騒潮干狩り
 8・21日 秋元病院メッセージ
 12日 潮騒俳句会
 20日 「潮騒人間塾」開講
 22日 潮騒家族会
 29日 潮騒アディクションフォーラム

編集後記

熊本県内で発生した大地震は、その後に本震がやってきて、今もって一向に収まる気配が見えず、被災地住民を苦しめています。2011年3・11巨大地震の、あの悲惨な記憶が新しいだけに言葉がありません。被災地の皆さん、お見舞い申し上げます。ただただ頑張ってください、というしかありません。でも、こんな時こそ「無力を求める」私たちの経験が役に立ちそうです。他人事に響こうとも、自分を超越する大きな力に身を委ねる生き方が、先の読めない不気味な時代に「何事か」のヒントを与えるように思います。潮騒では3・11で本部施設の階段や外壁が崩れ、あちこちひび割れて危険性が増しました。水回りも壊れ、その補修工事などで結構な持ち出しを強いられました。やっと現在、本部の外壁工事に手を付けることができ、ベテラン職人のシュンさんを中心に作業隊が頑張ってくれています。それにしても、つくづく日本は地震多発国だと思い知らされます。「今までの経験則から外れている」と専門家がいう熊本地震。とても不気味です。そんな中、被災住民が水や食料を受け取る時に整然と列を作り、文句一つ言わない姿をテレビで見て、深い感動を覚えます。やはり日本人は捨てたもんじゃない、と。半面、この機を狙って空き巣が増えているとの報道もあり、これには強い怒りを覚えます。さて、潮騒通信の編集作業ですが、手の内を明かせば当月内の発行がうまくいわずに苦労しています。積み残しの記事の配分にも悩んでいます。飛び飛びになってしまったチハルさんの回復記は、今月号でひとまず終えます。ほかにも入寮者ケーススタディの2回目も、都合により次号になりました。言い訳すれば切りがありません。自分たちの非力を恥じるばかりです。(市)

献金・献品を頂いた方 (4月15日現在)

- ・内堀 高義 様
- ・横田 博子 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。
 本当にありがとうございました。
 おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しく願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解のほどをお願いします。

潮騒通信 どっこい生きてます! 2016年4号**Contents**

- P② 山本五十六の教えに習い「潮騒人間塾」を開講します
 P③ 新年度の計画に沿って農業隊が本格始動
 P④ 2016年・潮騒作業隊の今
 P⑤ どっこい私も生きてます「チハルの回復記」第8回
 P⑥ ユタカ VS トム 対談 第4回
 「第4回 恨みとコーヒークップさえあればダルクは増えていく」
 P⑧ お花見&ボウリング大会
 P⑩ 受刑者からの手紙
 P⑫ しおさい俳壇「入学」
 P⑭ どっこい私も生きてます「トンちゃんの回復記」第2回

■ 編集・発行：

特定非営利活動法人
 潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
 〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
 〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
 TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091
 潮騒リカバリーホーム(中施設)
 〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 56号
 〒311-2213 茨城県鹿嶋市中 2773-16
 TEL:0299-69-9099 FAX:0299-69-9098
 潮騒スリークオーターハウス 鉾田
 〒311-2113 茨城県鉾田市上幡木 1113-39

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp
 ホームページ <http://shiosaidarc.com/>



